

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 18 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520424

研究課題名(和文) 日米現代文学にみる食言説と環境観に関する総合的研究

研究課題名(英文) An Interdisciplinary Study of Food Discourses and Environmental Views in Contemporary Japanese and American Literature

研究代表者

結城 正美 (Yuki, Masami)

金沢大学・外国語教育研究センター・教授

研究者番号：50303699

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：現代の環境観を多角的に検証するため、もっとも日常的なかたちで環境との関わりが具現されている「食」に着目し、文学的实践と社会動向の比較をおこなった。とりわけ汚染と食の問題を検証し、食の安全性を重視する社会的動向とは対照的に、環境との深いつながりゆえに、汚染されていると知りながら地域の食べ物を食べる人びとが文学に描かれていることを突き止め、現代の合理的価値観を揺るがす文学的想像力の営為を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research examined attitudes to the environment in literary and social discourses on food and eating primarily in Japan and the United States, with a critical focus on issues of toxicity. There are two major findings. 1. In literary approaches to food and toxicity, there is a subtle yet continuous focus on local people's act of eating local food while knowing of its toxicity. This stands in sharp contrast with the major social attention to food risks and safety. Examining various discourses, this research elucidated a much broader and deeper perspective of literary practices which encompass different values. 2. Comparing American literary approaches, this research found that a focus on people's knowingly eating locally sourced toxic food is recognized mostly in Japanese literature. This might reflect a difference between a shared interest in human kinship with nature in Japan and that of the environmental turn in the United States, as argued in this research.

研究分野：環境文学

キーワード：エコクリティシズム 環境文学 食 汚染の言説 水俣 チェルノブイリ 福島 環境人文学

1. 研究開始当初の背景

食をめぐる問題は、ジャーナリズムや教育とともに文学研究においても関心を集めているが、その主たる傾向は、(A)過去における食のあり方を文学作品に読み取り、事例収集をとおして食の世界の変遷を明らかにするもの、(B)グローバルな食産業にもとづく現代社会の食のあり方を批判的に再考する作品を解説的に紹介するもの、という二つに大別できる。食の問題を現代価値観の再考を含むかたちで根本的に検討するためには、上述した研究動向に加えて、食をめぐる社会的ロジックと文学的ロジックの関係(齟齬、緊張、交渉)を検討することが必要ではないかと考え、本研究に着手した。

食はきわめて日常的な問題であり、なおかつ環境問題のなかでもとりわけ社会的関心の高いテーマであるだけに、とくにアメリカのエコクリティシズム(環境文学研究)にみられることであるが、社会的言説が文学実践や研究動向をあらかじめ決定してしまう向きがある。しかし、社会的言説に絡めとられず、むしろ社会的動向を相対化しうるような食言説や環境観が文学実践に見出せることが、申請者のそれまでの研究から判りかけていた。それゆえ、本研究において、食をめぐる文学的表象を収集・分析し、食をめぐる文学的言説と社会的議論とを照らし合わせることにより、食という問題域に具現された環境観の特徴や問題点がより明快になるはずであり、ひいては人と環境との関係をとらえる視角の広がりや深化につながると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、日米の食をめぐる文学的表象を体系的に分析し、その記述様式のメカニズムや環境観をエコクリティシズムの見地から理論的かつ比較研究的に考察することを目的とするものである。そこからさらに、食に関する社会的言説と文学実践の緊張・交渉関係に斬り込み、食の問題やそこに具現されている環境観をより多角的に検討することを目指した。

食べ物や食べるという行為をテーマにした文学研究は散見されるものの、事例収集型かメッセージ発信型のものが主流であり、テキスト研究が社会的議論のいずれかに軸足がおかれていることが多い。両者の交渉関係に着目する本研究は、先行研究を参照しつつそれ

らを補うかたちで、人と環境との関係を多角的にとらえる視角を明らかにすることができると考えた。ローカルかつグローバルな問題系が複雑に絡み合った食・環境の問題はさまざまな視点から議論することが強く求められており、文学的言説と社会的言説の関係を分析する本研究はそのような要請に応えるものである。

また、本研究はエコクリティシズムという文学批評理論の発展に貢献することを目指すものでもある。食をめぐる文学実践をエコクリティシズムの手法で論じた研究は存在するが、比較研究的アプローチをとったものはないため、本研究はトランスナショナルなあり方を志向するエコクリティシズムの理論的・実践的発展に具体的に貢献しようとする。さらに、身体的・文化的・生態学的・社会的・政治的・コミュニケーション的な層をもつ食という領域において文学批評がいかにも実践されるべきかという方法論の点でも、本研究の試みはエコクリティシズムのあり方を内発的に問うものであり、それによってこの批評分野のさらなる深化を促すものであるといえる。

3. 研究の方法

基本的に、資料の収集と読み込みにもとづく分析と、その点検のための発表を有機的に関連させながら、研究を進めた。より具体的には次のとおりである。

(1) 文献・資料の収集、読解、分析

本研究を進めるためにはまず、食をめぐる文学的表象の事例収集ならびに食をめぐる諸言説の調査が不可欠である。したがって、食を直接的主題とするものからそうでないものまで可能な限り多くの日米現代作品や資料にあたり、地道に事例を集めた。集めた事例は先行研究や関連諸分野での研究を参照しながら類型化と分析をおこなった。

(2) 学会等での最新研究動向の収集および情報・意見交換

(1)で述べた文献調査は本研究の基盤となるものであるが、刊行物として発表される前の最新の研究動向や作品をとりまく状況を知るためには、研究者間の情報交換が不可欠である。したがって、文学と環境の問題に関心のある研究者が集う学会(ASLE: The

Association for the Study of Literature and Environment, ASLE-Japan / 文学・環境学会、等)に参加し、本研究に関連する食と文学についての動向について情報・意見交換をおこなった。

(3) 学会等での発表とそこで得られたフィードバックにもとづく研究の定期的な点検

本研究は4年間にわたる総合的な研究であり、基本的に個人研究として進めるものの、定期的に外部の評価を受けて点検することは重要である。そこで、国内外の学会でその時点での研究成果や展望を報告し、そこで得られた他の研究者からのフィードバックを参考に研究の自己点検をおこない、必要に応じて軌道修正をほどこした。

なお、年度ごとに次のように段階的な目標を掲げ、研究の進捗と深化を図った。

- ・平成 23 年度：食をめぐる文学的表象の事例収集と分析
- ・平成 24 年度：食をめぐる文学実践と社会的動向との比較考察
- ・平成 25 年度：食をめぐる文学的ロジックの理論化
- ・平成 26 年度：研究の総括

4. 研究成果

主として次の三つの成果が得られた。

(1) 食に関する情報が増加する一方で、食に対する意識は必ずしも高まっているとはいえない。そうした現状に文学はいかなる示唆をもつのか。それを検討する手がかりとして、食に関する情報ではなく食との向き合い方(食をめぐる価値観)が基底を成す作品を検討した。具体的には、食をめぐる価値観が作品に読み取れる書き手のなかでも、石牟礼道子、田口ランディ、森崎和江、梨木香歩の作品に着目し、食表象にうかがえる世界観、環境観を分析した。その結果、食べ物を安全/危険という観点からみる見方とは異質な価値観が記述されていることが明らかになった。それは端的に言えば、食べ物を消費者が選択する「モノ」や「商品」としてではなく、人への「賜物」としてとらえる見方である。一見すると前近代的な価値観と似ていないではないが、それがチェルノブイリや福島など原発事故で汚染された土地の人びとの食風景に

も描き込まれていることから、きわめて現代的な問題提起を孕んでいることを明らかにした。

なお、この成果は本研究の中間成果発表として、単著『他火のほうへ—食と文学のインターフェイス』(水声社、2012年)にまとめて出版した。同書は英語に翻訳され、Palgrave Macmillan社のエコクリティシズムシリーズ(Literatures, Cultures, and Environment)に入り、2015年6月に刊行される予定である。なお、この英訳に際し、アメリカの文学・環境学会ASLEの翻訳助成を受けた。

(2) (1)で述べたことと関連するが、日米の現代環境文学を比較すると、食べものを「賜物」ととらえる見方はアメリカの作品にほとんどみられないことが判った。それは何故なのか。おそらく合理主義的価値体系によるものだと思うのだが、確固たる結論には至っておらず、学会等で口頭発表して得られたフィードバックを参考に検討を続けている。ただ、この問題は、次の(3)で述べるエコクリティシズムの動向と無関係ではないと考えられる。

(3) 食べものを「賜物」とみなし、その食べ物を与えてくれる環境に敬意を示す。そういう環境との関係を築いている人びとにまなざしを向け、かれらの食の世界を描くことで、安全か危険かという尺度でははかることのできない人と環境との複雑な関係を際立たせる試みが、たとえば石牟礼道子らの作品に濃厚にうかがえる。そうした作品を批評・分析する際の研究者のスタンスに関して、ある発見があった。それは、研究者の合理主義的見地から作品をとらえる限り、作品の非=合理的世界(食べものを「賜物」とみなすような)に接近できないということである。これはとくにアメリカの場合にみられる傾向であり、詳細なテキスト分析に基づいて、今後の建設的議論につなげられるような反論を試みた。同時に、非=合理的な価値観が現代読者の合理的な自己を揺さぶり、環境観の根本的再考を促す可能性をもつことを明らかにした。

この点は口頭発表し(次項の[学会発表]1、2で)とりわけ2のカリフォルニア大学ロサンゼルス校での発表において非=合理的なるものを設定することの意義について懐疑が呈されるなど批判的な意見が出たが、それ

も含めて理論的考察をさらに進め、論文(“The Danger of a Single Story: Ishimure Michiko’s Literary Approach to the Minamata Disease Incident,” 共編の *Ishimure Michiko’s Writing in Ecocritical perspective: Between Sea and Sky*, Lexington Books より 2016 年刊行予定)を執筆した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1. Yuki, Masami. Why Eat Toxic Food?: Mercury Poisoning, Minamata, and Literary Resistance to Risks of Food. 査読有, *ISLE: Interdisciplinary Studies in Literature and Environment* 19.4 (2014): 732-750.

〔学会発表〕(計 12 件)

1. Yuki, Masami. From ‘Ecocriticism in Japan’ to ‘Japanese Ecocriticism. American Comparative Literature Association (ACLA) Annual Conference, 27 March 2015, Sheraton Seattle, U.S.A.

2. Yuki, Masami. Meals in the Age of Toxic Environments. UCLA Sawyer Seminar on the Environmental Humanities. 24 February 2015, University of California, Los Angeles, U.S.A. (invited lecture)

3. Yuki, Masami. Meals in Catastrophe: Emerging Tropes in Foodscapes of the Nuclear Age. International Symposium on Literature and Environment in East Asia (ISLE-EA), 22 November 2014, Meio University, Okinawa.

4. 結城正美、Ruth Ozeki のハイブリッドな食風景、日本アメリカ文学会中部支部例会、2014 年 2 月 15 日、富山大学。

5. Yuki, Masami. “To Eat or Not to Eat: A Comparative Analysis of Discourses on Food and Toxicity. ACL(X), 28 September 2013, Pennsylvania State University, U.S.A.

6. Yuki, Masami. Food Risks and Post-Minamata Literary Tradition in Japan. 7 March 2013, CJRC Lecture Series, University of Southern California, U.S.A. (invited lecture)

7. Yuki, Masami. Post-Fukushima Literary Discourses on Food and Eating. East-Asia Symposium on Literature and Environment. 7 December 2012. National Taiwan University, ROC. (keynote)

8. Yuki, Masami. A Sense of Hope and a Sense of Home in the Age of No Reliance: Foodscapes in Literary Minamata. Conference on Foodways: Diasporic Diners, Transnational Tables and Culinary Connections, 6 October 2012, Center for Diaspora and Transnational Studies, University of Toronto, Canada.

9. Yuki, Masami. Post-Fukushima Literary Discourses on Food and Eating. British Association for Japanese Studies (BAJS) Annual Conference, 7 September 2012, University of East Anglia, U.K.

10. 結城正美 (コーディネータ&モデレーター)、シンポジウム：境界の食風景、ASLE-Japan / 文学・環境学会全国大会、2012 年 9 月 1 日、近畿大学。

11. Yuki, Masami. Language and Imagination Before and After Fukushima: Japanese Literary Responses to Nuclear Catastrophe. International Conference: Comparing Fukushima and Chernobyl: Cultural Dimensions of Two Nuclear Catastrophes, 8-9 March 2012, Goethe University Frankfurt, Germany. (invited)

12. Yuki, Masami. Authority of Science in a Discourse of Food and Toxicity. JSPS Symposium: Risky engagements: encounters between science, art and public health. 5-6 January 2012, University of Manchester, U.K. (invited)

〔図書〕(計 3 件)

1. Yuki, Masami. Foodscapes of

Contemporary Japanese Women Writers:
An Arocritical Journey around the Hearth
of Modernity. [Trans. of 他火のほうへ]
Trans. Michael Berman. New York:
Palgrave Macmillan, 2015. 212.

2. Gebhardt, Lisette, and Yuki Masami, ed.
Literature and Art after Fukushima: Four
Approaches. Berlin: EV-Berlag, 2014, 120.

3. 結城正美、他火のほうへ——食と文学のイ
ンターフェイス、水声社、2012、267.

〔産業財産権〕
該当なし

〔その他〕
ホームページ等 該当なし

6 . 研究組織

(1)研究代表者

結城 正美 (YUKI, Masami)

金沢大学・外国語教育研究センター・教授

研究者番号：50303699

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし